視覚障がい者に向けた木育活動

森と木のクリエーター科　木工専攻　　堀田　陽介

１．背景と目的

木に親しみ、生活に木製品を取り入れてもらうための木育の活動がしたいという想いでアカデミーに入学した。ぎふ木遊館に遊びに行ったことが木育との出会いだった。私自身、網膜色素変性症という視覚障がいがあり、仕事や生活に悩んでいた。自分自身にしかできないことを考えていく中で、視覚障がい者の当事者として、同じ立場の人にこそ木について知ってもらい、木製品を生活に取り入れてもらいたいという想いが湧いた。

視覚障がい者は触覚を頼りに生活することが多いが、手に触れるものが、どんな物でできているか知る機会は少ない。触れるものの中には木でできているものも必ずあるはずで、木について知ることが普段の生活をより良くすることにもつながるのではないかという仮説が生まれた。

本研究は、視覚障がい者でも参加可能な木育プログラムを提供し、参加者のより良い暮らしにつなげることを目的とする。

２．ヒアリング

視覚障がい者に協力を得るために、視覚障害者生活情報センターぎふを訪問した。本施設は視覚障がい者への白杖を使った歩行訓練や、点字図書の貸出業務を行う施設である。全盲でありながら館長を務める山田智直さんに話を聞くことができ、研究に賛同いただくことができた。そこで、山田さんにぎふ木遊館に来てもらい、意見をもらうことにした。

ぎふ木遊館は館内に木製の遊具が点在し、立木の姿をした樹木にも触れることができる。樹齢 400 年ほどのスギをくりぬいた大型の遊具もあり、木のおもちゃで遊ぶだけでなく、空間全体で木を感じることができる施設である。実際にいくつかの木のおもちゃに触れ、木製遊具に触ってもらう体験をした。

「まあるいつみき」は数種類の木材の積み木で、手触りで違いを確認したり、二つの積み木をお互いにぶつけ合うことで響く音や重さの違いなどを体験した。

立木姿の樹木に触れることで樹皮の質感を感じたり、全体の大きさを体を伸ばしながら確認している様子がうかがえた。樹齢 400 年のスギの丸太をくりぬいた形状の遊具の中にも入り、体全体で木の良さを感じてもらった。

視覚障がい者でも木育の体験を十分に行うことができ、参加者が感じたことへ知識のフォローをすることで木に対する理解が深まり、コミュニケーションの創出にもつながることが分かった。

３．視覚障がい者に向けたぎふ木遊館体験プログラム

参加者：3 人（＋ガイドヘルパー2 人）
時間：3 時間
内容：木遊館施設体験、丸太を割る体験

視覚障がい者の参加者は３名で、ヒアリング時にも参加いただいた山田さん（全盲）と、あん摩マッサージ師をされている小栗大輔さん（弱視）、鍼治療の先生をされている林富美子さん（全盲）で、同行援助の２名の方にも参加いただいた。ぎふ木遊館の施設体験と生木に触れ、加工する体験を行った。

施設内のスギの立木に触れる体験では、触覚を使って表面にあるわずかな起伏のある潜伏芽をとらえていた。新しいことを知ることが喜びにつながっているのが確認できた。卵型の木の玉に触れる体験では、あん摩治療に通う患者の指先のリハビリにも使えそうだという意見を聞くことができ、木の素材の魅力を感じることができた。

施設内の遊具に触れる体験に加え、ヒノキとスギの生木に触れ、丸太を割る体験も行い、山に生えている木が人々の力で形を変え、暮らしの中に活かされていることもわかっていただけた。

視覚障がい者の方へ木育プログラムを提供し、木のことを知ることで喜びにつながり、木にまつわるエピソードなどで参加者同士の交流も行うことができた。木を使用したモノづくりができる講座に参加したいという意見もいただいた。

４．岐阜盲学校での木育プログラム
参加者：2 人（中学生）
時間：50 分
内容：ヒノキを割り、南京鉋で削って匂い袋作り

岐阜盲学校の中学生２名を対象に、ヒノキの「匂い袋」を作る講座を行った。ヒノキの生木の丸太に触れ、質感を触覚を使って観察し、割る体験や南京鉋を使い表面を削る体験を行った。南京鉋とは刃の両側にハンドルが付いた鉋の一種で、刃に直接触れることがなく安全に使用することができる道具である。ヒノキの削りくずを利用した「匂い袋」を製作する体験を行うことができた。

参加した生徒からは、次回はもっと大きなものを作ってみたいという感想も聞くことができ、体験が喜びや活力を生み出すことにつながると確認できた。盲学校の堤鉄博先生からは様々な材質に触れ、観察し体験することは生徒の今後の人生においても貴重な経験になることであると評価をいただいた。

５．実践を通して

視覚障がい者が、木に触れる体験で木のことを知り、喜びや活力を生み出すことにつながることや、体験を通じてコミュニケーションが生まれ、より良い生活につながることが分かった。

６．触れて知る体験の展開

視覚障がい者に向けた木育活動を通じて、触れて知ることが喜びにつながることがわかり、この良さや気づきを広めるたいと考えた。全盲でありながら国立民族学博物館教授の広瀬浩二郎先生が行う、触れて知るアートミュージアムのガイドツアーに参加し、展示物を触ることでしか味わうことのできない魅力を感じ、視覚にとらわれないものづくりの講座を行うことで触れて知る体験を提供しようと考えた。

７．スプーンクラブ・イン・ザ・ダーク
参加者：8 人（大人）
時間：3 時間
内容：目隠しをした状態でのスプーン製作

視覚に頼らないモノづくりの講座として、目隠しをしてスプーン削りをおこなうワークショップを考案した。視覚に意識が向かないように目を覆い隠し、削った時の感触がダイレクトに伝わりやすいように、南京鉋を使用した。グリーンウッドワーク・ラボの久保田芳弘さんにも協力をいただき、ぎふ木遊館でスプーンクラブ・イン・ザ・ダークとして企画を実施し、８名の参加者に体験いただいた。

あらかじめスプーンの表面と両サイドを仕上げたものを用意しておき、目隠しをして裏面を削り、厚みやスプーンの形になるように成形していく作業を行っていただいた。参加者に対して指先を使ってじっくり形をとらえていくように声掛けを行った。削っている最中のアドバイスも、指先を誘導して場所を伝え、削った時の音の違いなどを感じてもらいながら指導を行った。

参加者からは「うまく削れるようになると、楽しいと感じてもらえることができ、普段意識していなかった部分まで思考が巡り、目で見なくても作れたことに驚いた。この先の道具の使い方やモノづくりへの向き合い方に活かしていきたい」と感想をいただいた。

８．評価

研究に協力いただいた３名の方から評価のコメントをいただいた。

視覚障害者生活情報センターぎふ館長　山田智直さん

「自らの障がいをいい方向に転じた企画で、これからも自らの経験を同じ視覚障がい者にも伝えて行くことに期待します。」

ぎふ木遊館職員　福井樹さん

「施設として福祉連携を進めていく一環の中で今回の活動を今後も開催していきたいと考えている。」

グリーンウッドワーク・ラボ　久保田芳弘さん

「参加者が見えない中で指先の感覚や頭を使うことで徐々に上達していく姿に驚いた。スプーンクラブ・イン・ザ・ダークを定期的に行いたい。」

９．まとめ

視覚障がい者に向けた木育活動の中で、触れて知ることが喜びやより良い暮らしつながることがわかった。触れて知る体験を一般の方にまで広げることができた。

今後も視覚障がい者のための木育活動と、触れることで知ることの喜びを広げていきたい。